

虫のこえ ～音と声の差異～



暑い、暑い夏であった。

早朝から一日中耳に届く蟬の声は暑さを助長すると共に生命の躍動を感じさせ、外に出て日陰を探しては一息つき、その涼しさに感嘆の声を漏らす。住まいに戻れば一杯の水を口に含み、文明の利器に身を委ねて過ごす。とにかく暑かった夏は、兎にも角にも頭を下げ続けた夏であった。

その様な最中にあっても気付けば立秋を迎え、気温は下がらずとも夜には虫の鳴き声が聞こえてくるようになった。

「あれ松虫が鳴いている♪」とは唱歌『虫のこえ』であるが、この唱歌はなぜ『虫の音(おと)』ではなく『虫の声(こえ)』であったのだろうか。

これは自説である。

辞書によると、音とは「空気や水などの振動によって聴覚に引き起こされた感覚」とあり、声とは「人間や動物が発声器官を使って出す音」とある。ところが、虫には発声器官がない。『虫のこえ』に登場する虫でいえば、羽をこすり合わせることによって出る音である。

自然と共に生き、その恩恵に畏怖の念を抱きながら生きてきた私たちの祖先は、自然から発せられる数多くの音を言語、言葉として理解し、表現してきた。それは音を言葉で表現することによって、そこにある気持ちや心をも伝えようとしたからだ。

それが『虫のこえ』でも「チンチロリン」や「リインリン」と表現されている擬声語や、星がキラキラと輝く等の、キラキラと表現される擬態語と呼ばれるものになる。

音と声、両方とも音に違いはないが、音とはあくまでも耳で聞くものである。声には音を生き物に見立てて表したり、気配といった意味合いも含むものであるから、音を発したものに気持ちがあるとして、その気持ちを汲み取る、汲み取ろうとした時に音が声になる、ということが言えるだろう。

この気持ちを伝え合おうとする、心の遣り取りこそが声の正体である。私たちの祖先は音というものを私という存在と離れた別のもではなく、今、此処で私と共に生き、存在するものの声と解釈してきたのである。

身の回りにある音を、只の音として聞くなれば、その音はその場限りの儂いものになるが、自らに語り掛ける声としてその音を聴くならば、時空を超えて生きた言葉となる。

私たちが信仰する佛さまの言葉(お経)が正にそれであり、目の前に鳴いている虫がいなくとも、唱歌『虫のこえ』を歌えば心の中は秋となり、虫の声がどこからともなく聞こえてくるような気持ちになるのがそれである。

相手が無いのが音で、相手が有るのが声。声とは、私という存在が語り掛ける言葉であり、私という存在に対しての語り掛けられる言葉である。

とどのつまり、唱歌『虫のこえ』にある声とは何かと問われれば、「ああおもしろい」ということになる。

やっさん